



超訳

「神道大意」

和源鷹壤
吉田兼俱原著



神道大意は諸説あるが吉田兼俱(1435~1511)により著された書物。

その内容は時代を経た現代でも常に新しい日本精神を語るときに大きな意味を持つのではあるまいか。



吉田兼俱像(吉田神社蔵より)

もくじ

・ 超訳についてとお約束	2
・ 一節	3
・ 二節「神道大意」本編	5
・ 三節	7
・ 四節	8
・ 五節	9
・ 六節	11
・ 七節	12
・ 八節	14
・ 別記「研究問題点と古日本精神への回帰視野」	16



超訳についてとお約束

「神道大意」

吉田兼俱撰を和源訳とし、本人の理解を深めるメモ書きを多少手直しして後学の参考となれば幸いと思ひ公開します。

研究途上のため理解不足である部分や勝手解釈による意識を多分に含みますので御了承ください。

わかりづらい部分には前置きや文中に解説を前触れ無く挿入してあることがあります。

また理解を進めるための和源の思考跡も残してあります。

これも元は手書きメモと観ていただければと思います。

章立ては仮のもので本来はありませんので御了承ください。

第一節(前置き・なぜこういうものが書かれたのかを推測する)

日本神道は日本人の洞察力や観察力、感受性を基本とした世界観をとらえてあらわしたものです。

また神という存在があり、それを当たり前に「そこ」に感じるからこそその礼式を用いて恭しく謹みをもつて祭礼祭祀するものなのです。

神を感じ神々があるからこそその形態なのです。

特に特別な訓練無く神々を感じる人も多いのですが、時代が下るにつれ、人が都市文明の中に埋もれていくに従って神々は遠く感じにくいものとなってしまった。

また物理や社会的な欲に目を奪われたものたちも神々を感じる事ができにくくなってゆく。

命の自然なありようから外れていけば、神々の存在を感じる事ができなくなってしまう。

「大切なものほど見えないものである」

これは神々を感じるだけでなく、個人においても金言といえよう。

古来日本人は命の自然さをありのままに感じ、それに逆らうことなく尊敬と礼儀をもつて命と神々と運命と共にありました。

自然であること純粹であること・・・正直であること清浄であること。

それは日本人が大切にしてきた感覚です。

時代はくんだり仏教が入ってきました。

後にはキリスト教なども目にするようになりました。入ってきた宗教は言葉より始まっています。

それらは言葉で相手に理解を求めめるものですからとても説得力があります。

世界観は高度に理論化され、だれでもそれを読むことができます。

誰でも読むことができ理解できるものは伝播力があります。

また論理化された思考法は学問と同じ扱いを受けることとなりました。

そうして世界観を説明する用語まで仏教的な用語を用いて文章を書かれる時代がありました。

古い神道書は一見すると仏教書の亜流版に見えますが、そうではなく用語を借用するという苦肉の策が用いられてきました。

その後、伊勢神道(渡会神道)を始めとする鎌倉期に復古の兆しが見えました。

日本人ってなんなんだろう?この疑問が出たのではないのでしょうか?

それを深めてゆくと言葉でかんじがらめになった思考を脱し古来からあったものの意味を再認識したと考える良いでしょう。

日本人であることには深い意味があり、それを手がかりに命の意味を、社会のありようを考えるということです。

表現も仏教色を極力押さえて行く研究が進んでいきます。

なぜ神道書を書くのか?、あるがままの姿を感じて命を自然を理解する、本来の意味からいえば全くの亜流といえましょう。

しかしこの時代にも、人々が手に取れるものでなければ人は理解することも無く、本来の日本人のありようも衰退してしまう危機感が神道者に筆を取らしたのです。

第二節 「神道大意本編の超訳」

神とは何か？、感じていることを言葉で書くことは完全には難しいが、その手がかりとはなるだろう。

その手がかりとしてここに書かれるもの。

神は宇宙ができるより先にあり、天地が定まるようになったその形を考えたものも神と捉えます。

昼と夜があるように寒暖の差によって植物の育成が進むように、違いがあつて初めて物事は成長し、お互いの違いによって影響しあい変化します。

それは時と共に移り変わるものなのですが、常に最適化しようとする世界は不完全です。

不完全でないからこそ完全なのでしょう。

その違いや成長する根本要素を「陰」「陽」と仮に言うことにし、その変化しようとする形も意思も、それも神と捉えます。

つまり世界が最適化をめざす不完全さと、不完全さゆえの最適化の相克の要素も神々は生み出した。

そして宇宙や天地の中に在る意思を「神」といい。



万物の中に自然の中にある意思や命にある意思たちを「霊(神霊)」といい、人倫の中に在るものを「心」という。

(此処で人倫とあるのは、感情に左右される移ろう意思のことではなく、魂や人の善性や他の存在とつなく心神という意味であらう)

心とは神なり、人の体に在ってそれを司るもの故に。

神は宇宙天地の根本を司っている。

また物質そのものでもあり、宇宙や自然の運行そのものでもあり、それらの意思でもある。

それらを神という。

万物の中に在っては霊(神霊)といい、人にあっては心や運命をも司り影響を与える。

神とは無形にしてすべての物質の中に存在している。

物質が動く前の始まりを与えるのは形無きものであり、また命を養うものでもある。



第三節

人体に五臓があつて五神あり、其々臓器を守り其々に意思がある。それゆえに体内にある「神」を「たましい」という。

目に様々なものを映しているが、目はそれらを見ているのではない。目に映るものはその存在であり動きであり意思である。それゆえに神と捉える。

耳で様々なことを聞いているが、耳はそれらを聴いているのではない。耳に聴こえるその真相を神と捉える。

鼻で香りを、口に味を、身の感触寒暖も同じく神の働きです。

体の五臓や知覚関するものすべて、心の神「心神」を守る社として、形は宇宙天地の法則が同じく息づいており、同根であることを。

天神は七代にして、地神は五代を会わせ十二神と数えます。

神々は神力をもちいて、宇宙・天地を作り、万物・万類を育成し養育した。

その十二の神々に守られるよう、一日を十二時となつており、年は12ヶ月ある。人に十二の経絡(気の通り道)があり、また十二の因縁となつている。

宇宙であり天地自然であれ人間の体であれ、すべてに神々の力は働いている。

それらのことを知れば、天の運行も、地の運行も生きとし生けるもの全てのかかわり兼ね合いの、千編万化も神々のなすものと知るだろう。

第四節

天地の靈氣を受けて、天神・地神の違う性質の二つが体の中に保たれている。

大いなる世界においては交わらないものも、人の身の中によって同居し交わっているそれは運命である。

その二つを人体に比してみれば理解できる。

七柱の天神の化身は、頭に七穴あって天の七星にも現れる。(目二つ・耳二つ・鼻二つ・口一つ)

五柱の地神の化身は、体内にある五臓であり、地の運行の五行です。

天地合わせて十二あってこれらは天神地祇の合一の姿。

日と月は天地の魂魄であり、天地の運行に欠かしてはならない存在。

人の魂魄は日月二神の靈性によって生み出されている。(日の神を天照大神、月の神を月読大神と申します)

神の道の心を守る者は、天地の日月の靈性を正しく受ける。

心動くときには、魂魄も動き、心乱すときには魂魄も乱れる。

心平静なる時には、魂魄も穏やかです。

魂魄の不安定は運命に多大な影響を及ぼします。

心や魂魄を守るときには、鬼神(様々な意味があります。心身に影響ある神々や神靈

や霊などと捉えておいてください。後の節にて解説があります）を鎮めや祭りをおこなうが良いのです。

鬼神鎮めをおこなわず、心や魂魄を守ろうとしない時は、鬼神乱れて災難を引き寄せます。

鬼神が乱れば、災難の兆しが生まれやがて種となり、それが成長すれば災難となるのです。

それより守ろうとするならば要たることがあります。

それは自己の心の神「心神」を祭り、祓をおこなうこれ以上のことはありません。これを内清浄と呼び、外清浄といえます。

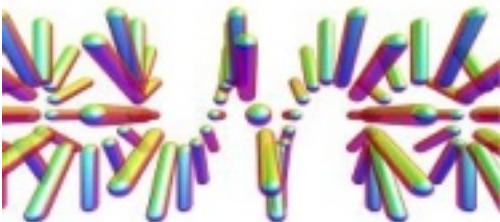
第五節

心には七つの景色があります。

「喜び」「怒り」「哀しみ」「楽」「愛」「悪」「欲」というものがああります。

心や魂魄が人体にあたえる巡りがあります。

「生」「長」「老」「病」「死」というものがあります。これも合わせて十二あって、神代からの数なのです。



心が躍動するのも神々の作用が働いていないとは言えず、人が成長し形を整え変化してゆくのも同じで、神々の作用から離れるということはありません。

喜びの心が過ぎると「肝臓」を守る神が痛む。

怒りの心が過ぎると「心臓」を守る神が痛む。

哀しむ心が過ぎると「肺臓」を守る神が痛む。

楽しい心が過ぎると「腎臓」を守る神が痛む。

愛する心が過ぎると「胆臓」を守る神が痛む。

悪の心が過ぎると「大腸」を守る神が痛む。

欲の心が過ぎると「脾臓」を守る神が痛む。

神道によって生き方を考えますに、穢れというものを嫌います。

まずは自己の執着の心を「忌む義(正しき心)によって嫌うの意味」なのです。

「忌」の字は、「己」が「心」と合わさって作られるもの。

自分はそんなことなど知りません、ましてや穢れや体内の神々が自分の心や行いによって痛むなど自分に関係ないと言うかも知れません。

肉体が有る者ならば、

喜びがないとは言えません。

怒りがないとは言えません。

哀しまないとは言えません。

楽しみがないとは言えませんが。

愛がないとは言えませんが。

悪いことを考えないとは言えませんが。

欲がないとは言えませんが。

過ぎることと、必要を満たしていないのは災難となって現れます。

また場合によっては病気となって現れます。

自己の心と対話して制御し、心の調和をもたらす者は神々のご加護が篤い者なのです。

第六節

神を知ることを「悟り」と言います。

神を知らないことを「迷い」と言います。

神を知らない「迷い」にある者は自分が迷っていることに気づきません。

迷っていることに気が付きませんから、鬼神を引き寄せて道を失うのです。

道を失うとは心の指針がなくなり、運命はしほみ、心は乱れ、やがて生きる場所を失うということです。



神を知り悟るものは、「正」を知っていますから「迷い」というものを見極めることができず。

「迷い」見極めることのできるものは鬼神を祀(祭)る。

迷いをもたらず鬼神を祀り、荒れる気を鎮め被い清めるときに「道は治り」「ゆく。道治つてゆくと(運氣が修正されると)その他のことも次第に好転します。

正しく運が好転してゆくと、努力の成果が出てきます。努力の成果が出てくれば名声を得ることもあります。

神々を祭る者は安寧を得る。

神々を祭らぬ者は危ういということができませんでしょう。

第七節

神々には大きく役割や性格などを基に分類すれば三つの位があります。

一には元神といます。

二には託神といます。

三には鬼神といます。



一の元神は宇宙や日月星辰などの神々を指します。その存在は天に輝き、その神徳は三界におよびます。

(三界には様々な説がありますが、此処では神界・現世・幽世と考えておく和良好的しよう)

それらの神々の物理的側面は見ることはできるのですが、その妙体(正体)を見ることがなかなか難しいです。

元神はきわめて清浄で玄妙なみえざる存在と言えましょう。

二の託神は人間のような情の中に浸かっている存在です。

情の中に浸からないとは近くいえば草木などの類に近いでしょう。

大地にては命の根源たる気を運び、時として凝固して意識も持つでしょう。

空に出では雲のように風のように形を現すでしょう。

四季にに応じて生老病死を連想させる色彩や風景を写すし出すでしょう。

しかしそれらの存在は無心無念なのです。

それらの存在を託神といえます。

第八節

三の鬼神とは帰神とも書く場合があり、人に最も近い存在と言えます。僅かに一念動けば、心は他の世界へ移り入る。

ですから心に天地を感じれば、天地の霊は我の中に帰る（来ると解釈してもよいかと思いません）。

心に草木を感じれば、草木の霊は我に帰る。

心に畜類を感じれば、畜類の霊は我に帰る。

心に他人を感じれば、他人の霊は我に帰る。

字に現れています「鬼」とは「帰」と。

鬼神（帰神）は心や霊体の賓客と考えることができます。

他より来て他に帰る、また家を出て家に帰るかのようです。

鬼神とは万物に宿る意思体と捉えても大きな間違いはないでしょう。

また人のより所とするべきところです。

元神や託神などと人をつなぐ役目も果たすと考えることができます。

国の命脈に関わる神もこの範疇に入ると思われます。

土地を守る御神霊もその範疇に入ることでしょう。

人の善悪に感応してそれを助ける事もあると考えられます。

正しく祀られた先祖もその範疇に入ると考えることも出来ます。

鬼神が鎮まるときは国家は安寧し、民は安らぎます。

鬼神が乱れるときは国家は危機に陥ります。

先賢たちは神々を祭り。

霊山鎮守のために神々を祭り。

各地の重要な土地に神社を建立して祭り。

国々村々に神々を祭った。

其々の家々に先祖を祀り、人倫の道を守る。

△**神名や系譜、各々神々の記載あれども日本書紀・古事記の記載を読まれたし。**▽



別記「研究問題点と古日本の精神への回帰視野」

神道とは読んで字のごとく「神の道」です。

道とは物や人を運ぶのに適したという意味があります。

ただ神の道というからには社会環境上の道という範囲で捉えて狭い範囲で神道を定義してはならないのではないのでしょうか？

神という視点から論じる必要があると思われ、その視点で見るとすれば日本人の受け継いだものであり、とくに日本の神々を信仰する様々な形であり、教義であり建築様式や調度品の数々であり、神話や古典文献であり、人間の持つ秘力への探求と神々の世界との関わり方であり、古来より受け継がれる秘儀の数々。

書き出せば数限りないものであるのだろうが、日本の神々が日本人の形を日本人たらしめている構成要素の根幹部分こそが神道であるといえよう。

例えばつまらない論議の一つ二つをあげて論じれば、神話と神社のつながりへの疑問や、神話や教義と祈祷や儀式の関連性への疑問など人間的視野で論じればいかにも真剣みのある話だが、こと神々の視点（神道の範囲に入るものを時間的に成長発展させた意思という意味で）から観てみれば、まことに些細な論議に過ぎない。

ここは恐らくで申し訳ないのだが、神々の視点というモノを考えたときに、それが必要だから時間をかけて発展成長させまたはそれらの種を用意した、ということだろう。

それでは意味がわからぬと申される方に、神の特性を述べさせていたいただきたい。

神とは「火」と「水」をあわせて読めば「カミ」とも読めるように、相反する性質の

ものを同時に内包して反しない存在であるといえよう。

相反すると人間の単純な眼で見ればそうなるのだから、詳しく追求してゆけばそれらを利用して多大な恩恵を受け現代文明の基礎としていくことに気付く。

つまり近視的に見れば相反する性質のものであっても、遠視的または化学反応的に研究を進めてゆけば神々の性質に近いものを理解し制御することができる。

そういう視野から見れば、日本精神文化を支えるに必要な、日本の精神根幹を指す言葉が神道であるということもあながち間違いいではないだろう。

神道を研究していき詰る箇所がいくつもある。

やればやるほどわからなく成る部分がある。

神社神道ではあえて教義や神話を語らないようにしている部分があります。

教義とは日本の神々を信仰し生きる規範や考え方の基準となるもの。

神話と神様のご利益が結びつかない場合があるなどといったことがあります。

なぜ神社神道と教義が結びつき難いかというと、神々への信仰と商売や学問の神様と
いつている部分に開きがあるからです。

教義には神々を知るということが含まれます、たとえば稲荷の神は土地の神であり豊饒を祈り助けてくださるようになるという発祥があり商売とは結びつき難いという矛盾が生じる。

こういう問題が多発するわけです。

教義は信仰を助けて、個人と神を結び付けます。

神社が悪いのではなく運営に関する方々が、そのあり方や本質が霞んでいるところがあるだけなので、神社に対してお参りはとても大切なことです。

たとえば神社にはその土地を安定化させ、そこに住む人の精神を安んずる作用を持っていると感覚の鋭い人は見ることでしょう。

まさしくその通りで有名どころでいえば各元伊勢神社を線で結べば百三十近くの法則のある三角形が現出するのであり、古代結界法がそこに現出する。

そのような幾重にも隠されながらも永続的に日本を守り、そこに住んでいるものたちを守るシステムが古代より構築され維持されてきたことを知れば、神社という建物がありにそこに神職が祭祀を執り行い祈ることによって維持されている真実を知ればそれは多大なる意味を持つてくる。

知識をもって思考するとき、凡そ削除的で合理的でないものや可能性の無いものを削除し無難なものを残す性質を持っている。

そういう目線で物事を考えるとき、神々が計画して残したものの全容を見ることはできはしない。

もしかしたらそれもあるかもしれないという興味から物事を始め、「疑わず信じすぎず試してみる」を繰り返してその先に神々の目線を垣間見るのではないだろうか。

編集後記

日本文化を大切にし神様や魂や霊などを信じる方のためにこれは製作されています。

このPDFデータ内の文章および写真画像などの無断転載を禁じます。
許可無くサイトなどにアップデータしての配布を禁じます。
家族・友人間へのデータの譲渡は認めますが、一部引用などでの引渡しをしないでください。

著作権は保持しています。

2015（C）和源神道

著者近影



和源神道

住所 和源神道 岡山県井原市下稻木町字金人2434-1

和源神道公式サイト

URL <http://www.ibara.ne.jp/~konzin>

電子メール kazumina@ibara.ne.jp

和源神道公式サイトQRコード



超訳

「神道大意」

吉田兼俱撰

和源鷹壤訳



宇宙や天地の中に在る意思を「神」といい。

万物の中に自然の中にある

意思や命にもある意思たちを「霊(神霊)」といい。

人倫の中に在るものを「心」という。

